学童集団疎開体験記

中村敏和（三山・57歳）

昭和十九年の夏。私は、東京都杉並区西田国民学校（現在の小学校）の六年生だった。

この年の七月、サイパン島にいた日本軍は米軍に破れ、そこに米軍は、飛行場を建設した。それで近い中にB29という大型爆撃機が東京を空襲するということは誰の目にも明らかであった。

政府は、空襲の時に足でまといとなる子どもを疎開させることに決めた。学校では、「君は縁故か？集団か？」というのが皆の最大の話題だった。縁故というのは田舎の親戚のところに疎開することであり、集団とは学童集団疎開のことである。そのどちらかにきめなければならなかった。

私は、そのどちらにも行きたくなく、先生に返事するのを伸び伸びにしていた。しびれを切らした先生から「我が校の集団疎開の行先は、運のよいことに長野県の別所温泉の旅館だ。毎日温泉に入れるし、食べ物も沢山ある。先生も一緒に行くのだから集団に決めろ」と言われてしぶしぶと参加した。昭和十九年八月三十一日の夜。集団疎開の一行は、学校から荻窪駅へと向った。駅まで、家族が子どもにつきまとい別れを惜しんでいた。私のところには、同級生や下級生の親が何人も寄ってきて、「よろしくお願いします」と挨拶した。私は、ガキ大将だったために親たちは、我が子がいじめられては大変と思って挨拶に来たのであろうが何だか変な気持ちだった。

長野県の別所温泉の旅館が学校であり、家庭であった。ここには十数軒の旅館があり、どの旅館にも学童があふれるように詰め込まれていた。

ここの温泉は、温度が低く、わかさなければ入れなかった。だが燃料が不足しているので、毎日入るというわけにはいかなかった。食べ物も十分でなく、毎食、どんぶりに六分目ぐらいの大豆粕のごはんか、さつま芋が入ったごはんだった。ときには、南瓜（かぼちゃ）、芋だけのこともあった。これを代用食といった。空腹でたまらず、わかもとや仁丹などの薬を食べたり、絵の具をなめたりしている人もいた。たまに、親から食べ物が送られてくることがあった。いり米やいり豆が多かった。それを水と一緒に少しずつ何日間も食べのばしていた。その中に、特攻隊というものが生まれた。体が小さくてすばしこいものが特攻隊となって、よその家の柿や栗をとったり、旅館の台所に夜、こっそりと入りこみ食べ物を持ち出してくるのである。また、旅館には時折、闇商人がやってきて、宴会をしていた。その部屋に入っていって、おじさんたちから食物を恵んでもらい、皆に持って帰るのも特攻隊の役目だった。それで、たまにはおいしいものも食べられた。長野県の冬の寒さは想像以上であり、東京の子どもたちには耐えられなかった。コタツに入れる木炭も少ししか与えられないので凍死したら大変と思

い、何枚もフトンを重ねて皆で抱き合うようにして眠った。

また不潔だったために、しらみが発生し、その退治がまた大変だった。

このような中でも、六年生は、来年の春、中学の受験があるので（昔の中学には試験があった。不合格の人は、小学校の高等科へ入った。）皆、一生懸命に勉強した。当時は、公立、私立を通して一校しか受験できなかったので、必死だった。また六年生は、下級生に自殺者や逃走者を出さぬように面倒をみる義務があったので一段と大変だった。（他校では自殺した人もいた。）

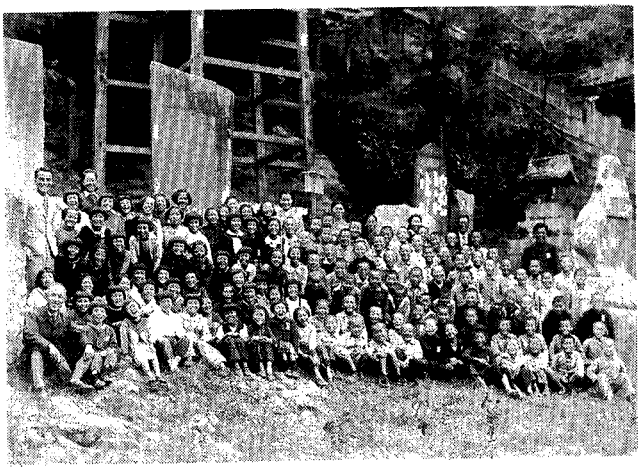
この年の十二月二十三日、皇太子さま（現在の天皇）のお誕生日に皇后陛下（現在の皇太后陛下）から学童集団疎開者の全員に対して、和歌とビスケットが贈られた。和歌は、「つぎの世をせおうべき身ぞ　たくましくただしくのびよ　さとにうつりて」というものであった。ビスケットは一人五枚ずつ配られた。先生から「一度に食べず、一日一枚ずつよく味わって食べるように」と言われた。何年かぶりで食べたビスケットは非常にうまかった。皇后陛下から贈られた和歌は、毎朝、授業前に唄わされた。この和歌を唄うようになってから特攻隊はなくなった。

昭和二十年三月九日。私たち六年生は、中学受験と帝都防衛のために東京に戻ることになった。下級生は、六年生が羨ましくてたまらず見送りの時は皆泣いていた。

丸子電鉄の別所温泉駅から上田駅に出て、上田駅から列車に乗り換え、上野駅へ向って出発した。やがて夜になった。車掌が「空襲警報が出た」と告げて廻り、列車の電燈が消された。暗闇の中で列車はノロノロと走った。一時間位ウトウトと眠っていたら隣にいた友達が「もう夜が明けた。」と言って騒ぎ出した。窓から東の方を眺めると真っ赤だった。日の出のようであるが少し赤すぎる。そしてそれが、次第に大きくなってくる。日の出ではないようにも見えたが、この附近は軽井沢あたりであり、まさか東京大空襲の火災であるとは誰も思わなかった。

それからいつの間にか、ぐっすりと眠ってしまい、早朝、列車は上野駅に到着した。スピーカーの音で目がさめた。駅の周辺は、すっかり焼けてしまっており、煙りがくすぶっていた。焼け出された人たちがウロウロしているのが窓から見えた。この日は沢山の死者が出て、焼野原になっていたが省線電車（現在のＪＲ線）は動いていた。私の家は郊外だったため無事だったが、母は本当に恐かったと震えていた。

大空襲により、焼け出された人達は地方に疎開したので、その年の中学の受験者は大幅に減少し、都内の全中学校が受験者を全員無試験合格とするとの新聞発表があり、ホッとした。



私たち昭和二十年三月卒業者は、卒業式も挙げていなければ、卒業証書も貰ってない。卒業生はバラバラで全く連絡もとれていない。皆現在は定年間近で相当な地位になっているものと思う。私は同窓会を開きたいと以前から思っているが、中々暇がなく、その儘になっている。定年退職になったら友達を探し出し、何とか同窓会をそして卒業式を実現したいと考えている昨今である。